

新版 指導要文集

しんぱん

しどうようもんしゅう

だいにしょう

じっせん

第二章 実践

たいてん

退転のいましめ

このたびごうじよう　ぼだいしん　発　たいてん　がん
今度強盛の菩提心をおこして退転せじと願じぬ。

005　開目抄　かいもくしょう

たいてん　退転のいましめ70ページー11行

こんど　つよ　ぼだいしん　さと　もと　ぶつどうしゆぎよう　こころ

今度こそ強い菩提心（悟りを求めて仏道修行する心の
お　こと）を起こして、どんなことがあつても、
ぜったい　たいてん　絶対に退転し

せいがん　ないと誓願したのです。

おのおのようじんあ

各々用心有るべし。少しも妻子・眷属を憶うことなかれ、

けんい おそ

権威を恐るることなかれ。今度、生死の縛を切つて仏果を

と たま

遂げしめ給え。

075 弟子檀那中への御状
でしだんなちゆう ごじよう

退転のいましめ 866 ページ 9 行
たいてん

なん お

（難が起こってくるかもしれないことについては）あなた方も

がた

ようじん

用心していきなさい。ちよつとでも妻や子ども、親族や家来たちの

つま こ しんぞく けらい

しんぱい こころ うご

ことを心配し心を動かされてはなりません。幕府等の権威を恐れ

ばくふとう けんい おそ

こんど むじよう せいし まよ つな た き

てはなりません。今度こそ、無常の生死の迷いの綱を断ち切つて

いしょうじょうぶつ と

一生成仏を遂げていきなさい。

おのおのわ でし もの ふか よし ぞん
各々我が弟子たらん者は深くこの由を存ぜよ。たとい

しんみよう およ たいてん
身命に及ぶとも退転することなかれ。

127 法華行者逢難事 ほつけぎようじやほうなんじ

たいてん
退転のいましめ

1304 ページ 3 行

なか うちにん ほうもん いにしえ しん いま さきざき
中にも日蓮が法門は 古こそ信じがたかりしが、今は前々
言 置 すで 合 由 ぼう ひとびと く
いいおきしこと既にあいぬれば、よしなく謗ぜし人々も悔
ゆる心あるべし。

のち しん なんによ おのおの 代
たといこれより後に信ずる男女ありとも、各々にはかえ
おも はじ しん せけん
思ふべからず。始めは信じてありしかども、世間のおそろ
捨 ひとびと 数 なか かえ もと
しさに、すつる人々かずをしらず。その中に、返つて本よ
ぼう ひとびと きようだいしよう 謗 ひとびと 数 多

り謗ずる人々よりも強盛にそしる人々またあまたあり。

(171 兄弟抄

たいてん
退転のいましめ 1481 ページ 5 行

彼のあつわらの愚癡の者ども、
いいはげましておとすこと

なかれ。
彼らには、
ただ一えんにおもい切れ。
よからんは

不思議、
わるからんは一定とおもえ。
ひだるしとおもわ

がきどう
ば、餓鬼道をおしえよ。
寒
さむしといわば、
はっ 寒
八かん地獄をお

しえよ。
おそろしといわば、
たかにあえるきじ、
ねこに

あえるねずみを他人とおもうことなかれ。

これはこまごまとかき候ことは、かくとしどし月々

ひび　もう　そうら
 日々ひびに申して候えども、
 名　越　あま
 なごえの尼・しょうぼう・のと
 少　輔　ぼう　能　登

房・三位房などのように候、おくびよう、物おぼえ

欲 深 疑 おお もの 塗 漆
ず、よくふかく、うたがい多き者どもは、ぬれるうるしに

みず 空 切 そうろう
水をかけそらをきりたるように候ぞ。

さんみぼう だいふしぎ こと そうら
三位房がことは大不思議の事ども候いしかども、

殿 原 思 ちえ もの 嫉 たも
とのばらのおもいには「智慧ある者をそねませ給うか」と

愚癡 ひと 思 もの もう そうら
ぐちの人おもいなんとおもいて、物も申さで候いしが、

腹 黒 だいなん 当 そうろう
はらぐろとなりて大難にもあたりて候ぞ。なかなか、

散 々 もう 助 辺 そうら
さんざんとだにも申せしかば、たすかるへんもや候いな

ん。あまりにふしぎさに申さざりしなり。また、かく申せ
不思議 もう

痴 ひと し 亡 おお そうろう もう
ば、おこ人どもは「死もうのことを仰せ候」と申すべ

かがみ

もう

し。鏡のために申す。またこのことは、彼らの人々も

ないない

怖

恐

そうろう

覚

そうろう

内々はおじおそれ候らんとおぼえ候ぞ。

しょうにんごなんじ

(219 聖人御難事

たいてん

退転のいましめ 1620 ページ 14 行)

あつはら

しんじん

よわ

ひと

たい

はげ

ことば

あの熱原の信心の弱い人たちに対しては、励ましの言葉をかけて

かれ

あげなさい。けっしておどしてはなりません。彼らには、ただきつぱ

はら

よ

けっか

ふしぎ

わる

けっか

り腹をきめなさい、善い結果になるのが不思議であり、悪い結果にな

とうぜん

かんが

い

き

くうふく

るのが当然と考えなさいと言ひ聞かせなさい。空腹にたえられない

がきどう

くる

おし

さむ

といったら餓鬼道の苦しみを教えなさい。寒さにたえられないとい

はちかんじごく

くる

おし

おそ

たか

つたら八寒地獄の苦しみを教えなさい。恐ろしいといつたら鷹にあ

きじ

ねこ

ねずみ

たにんごと

おも

おし

つた雉、猫にあつた鼠を他人事と思つてはならないと教えなさい。

か

ねんねん

つきづき

まいにち

このようにこまごまと書いたことは、年々、月々、毎日のようにい

なごえ

あま

しょうぼう

のとぼう

さんみぼう

つてきたことですが、それでも名越の尼や、少輔房、能登房、三位房

おくびよう

きゅうどうしん

よく

ふか

うたが

などのように、臆病で、求道心がなく、そのうえ欲が深く、疑

ぶか ひと

ぬ

みず

そら

かた

き

い深い人たちは、塗つたうるしに水をかけ、空を刀で切るように、

おし

やく

た

さんみぼう

まったく教えたことがなんの役にも立っていないのです。三位房につ

ふしぎ

まえまえ

いては、たいへん不思議なことが前々からあつたのですが、それをい

さんみぼう

ちえ

もの

にちれん

うと、三位房のように知恵がある者を、日蓮がねたんであのようにい

おろ

ひと

そうぞう

おも

いま

なに

うのだと愚かな人は想像すると思つたので、今まで何もいわなかつ

よそう

あくしん

だいなん

たのですが、（予想していたとおり）ついに悪心をおこして大難にあ

ふこう し

じゅうぶん

いまし

い、不幸の死をとげてしまったのです。かえつて十分に戒めてい

ふしぎ

たならば、たすかったかもしれませぬ。あまりにも不思議だつたの

おろ

ひと

で、これまでいわなかつたのです。またこのようにいえば、愚かな人

し ひと

かつて

びとは、死んだ人のことを、勝手にいっているというかもしれませ

のちのち かがみ

さんみぼう

し

ん。しかし、後々の鏡のためにいつておきます。また、三位房が死

ひと

だいしようにん

いちもん

はくがい

ひと

んだことは、あの人びと（大聖人の一門を迫害した人たち）も、

こころ

おそ

おも

心のなかでは恐ろしいことだと思つてゐることでしょう。

むりようおくさい

ごんきよう

しゆぎよう

ほけきよう

たとい無量億歳のあいだ権教を修行すとも、法華經を

離

はなるるならば、ただいつも地獄なるべし。

じごく

うえのどののごけあまごへんじ

(297 上野殿後家尼御返事

たいてん

退転のいましめ

1833 ページ 2 行

にちれん でし 少 輔 ぼう もう 能 登 ぼう
日蓮が弟子に、しよう房と申し、のと房といい、なごえの
あま もう 欲 深 ところ 臆 病
尼なんど申せしものどもは、よくふかく、心おくびよう
ぐち ちしや 名 乗 奴 原
に、愚癡にして、しかも智者となのりしやつばらなりしか
こと 起 便 得 多 ひと 落
ば、事のおこりし時、たよりをえておおくの人をおとせし
なり。

311 上野殿御返事 (梵帝御計らいの事) うえのどのごへんじ ぼんたいおんはか こと

退転のいましめ たいてん 1867 ペー 5 行

魚の子は多けれども魚となるは少なく、菴羅樹の花は多く
咲きさけども菓になるは少なし。人もまたかくのごとし。菩提
心を発す人は多けれども、退せずして実の道に入る者は
少なし。すべて凡夫の菩提心は、多く悪縁にたぼらかさ
れ、事にふれて移りやすきものなり。鎧を着たる兵者は
多けれども、戦に恐れをなさざるは少なきがごとし。

374 松野殿御返事（十四誹謗の事）

退転のいましめ
1990 ページ 9 行